

# 言葉屋

10巻 さようであるならば



## 第一章 虹声宅配便

小さいころ詠子は、音は地面から鳴るものだと思っていた。雨が降り、雨つが地面をたたくと、まるで世界中から雨音が鳴っているような気がした。雪がつもって大地にふたをすると、世界はしんと静まりかえった。だから、世界の音はすべて、地面から生まれているのだと、詠子はそう信じていた。

そして今、詠子は雪を見つめている。雪は窓の向こうで、とめどなく降り続き、見慣れた景色をどんどんと白く染めていく。いや、消していく。

昔、詠子の部活の先輩であり、美術部とタロット同好会を兼部していた犬飼先輩が言っていた。油絵を描きなおしたくなった時には、描いた絵の上に白い絵の具をぬって、キヤンバスをまっしろにもどすのだ、と。そう考えると雪は、神さまの油絵を消す、世界のデリートキーのようだった。

やさしい粉雪が、音もなく世界を消していく。音を、消していく。

そしてやがて、すべてがまっしろになった時――。

詠子は、目を覚ました。筋肉がはじけたように体がびくりとして、詠子は飛び起きる。

夢、だったのだ。

こんなにも残暑が厳しい季節に、雪の夢を見るなんて。と、詠子はびっしりと汗をかいた体あたりを見まわす。そこは、詠子の住むマンションの屋上にある、おじさんの小屋だった。どうやら詠子は、おじさんのお気に入りのソファにすわっているうちに、うたた寝をしてしまったらしい。

とてもかんたんにつくられた掘った小屋に、深緑色の扉。四方八方が下から上まで本で埋めつくされていて、本以外にあるものといえば、この大きな革ばりの茶色いソファと、机、そして小さな脚立くらい。おじさんが段ボール箱一箱分、お気に入りの本を持っていったはずなのに、この小屋の本の総量は、少しも減っていないように見えた。

部屋は、詠子がなにも知らなかった数か月前と、少しも変わっていないように見えて、ところどころ、失っている。机の上にあった大きなデスクトップパソコンも、プリンターも、おじさんがいつもつかっていた赤ペンも、おじさんが本の上で寝る時につかっていた毛布も、こまごまとしたおじさんの私物は、もうここにはない。おじさんは昨日、この小屋を去ってしまった。詠子のおじいちゃんとおばあちゃんの家に引越して、しかし、今はまた病院に入院している。

詠子がおじいちゃんから、おじさんが未知の脳の難病であることを聞かされたのは、ほんの数週間前のこと。本日は数年前から予兆があり、そのころからおじさんは、人知れず少しずつ病院に通っていた。そして一か月前、詠子がおばあちゃんと一週間イタリアに行っているうちに本格的な検査入院をして、その結果を受け入れた。これまでずっとごまかそうとしていた病状と向き合う決心をして、それを詠子に打ち明けた。

病名は、まだ知れない。どうやら脳に関する病気であり、全身の筋力が弱っていく病気であることは確認できているものの、既存の病気とは少しづつ違った傾向があるそう

## こんな物語

小学5年生の古都村詠子のおばあちゃんのお仕事は、小さな雑貨屋さん。ある日、その本業は「言葉屋」と知り、言葉職人の見習いとして、おばあちゃんの家に入居する。同じクラスになったしんちゃん、雅名満月、その幼なじみの須崎哲平、桐谷伊織と仲良しに。中学校では、同じ言葉屋の子・喜多方語が登壇。修行しながら、学校の友だちや家族など、さまざまな人間関係の中で、「言葉」の大切さを学び、成長していく。――ネットなどで傷ける言葉がとびかう現在、いつしに「言葉」との向き合い方を考えませんか。

で、これまでにない新しい病気である可能性が高いらしい。だからこそおじさんは、これから、入院をくりかえしながら、いつどうなるかわからない自分の病状と、ともに生きていかなければならない。ただ現状、筋力が弱っていることは確かであるため、エレベーターがつかないこの屋上で暮らすことは、今はもうできなかった。だからおじさんは、今の入院が終わっても、もうこの小屋にはもどってこない。詠子がくたびれて学校から帰ってきたときも、キッチンでのんびりカラーをつくらせているおじさんにはもう会えない。甘いハニータをいれてくれるおじさんにも、カラフルなサンドイッチ・ビュッフェをつくらせてくれるおじさんにも会えない。おばあちゃんが元気をなくした時に、いつしに「おばあちゃんのためのおいしいホットスモージー研究会」を開催してくれるおじさんは、もうここには帰ってこない。気持ち切り替えたくなった時に、コーヒーを片手にこの小屋の深緑色の扉をノックしても、おじさんはもう、詠子のなにも受け止めてはくれない。

おじさんは、もうこの小屋にはもどってこない。

こない、こない、こない。

起きてみると、その言葉ばかりが頭をたたいて、めまいがした。脳が、「助けて」と心



に手紙を出そうとしているかのように、涙が上から下へつと流れた。

明日から二学期で、もう学校がはじまるというのに、詠子は、「おじさんのいない日常」がはじまることごとくわくわくしたかたがなかった。そんなことを言ってもしかたがないとわかっているのに、わくわくしているからこそ、足がすくんだ。ここから、出たくなかった。出れば、おじいちゃんが長年手入れをして育ててきた、屋上庭園に足を踏み入れることになる。そして、その庭園からこの夏、急に植物が少なくなった事実を目の当たりにしなければならなくなる。これからおじさんの入院のサポートや、日々の生活の介護が必要になることを見こして、おじいちゃんはこの夏、屋上庭園の規模を大幅に縮小した。縮小された庭園はもう、これから大きくなることは、きつとない。

「おじいちゃんも、もう歳だからね」

と、おばあちゃんも先日、庭の縮小の手伝いをしながら、力のない笑みを浮かべていた。おじいちゃんとおばあちゃん、詠子のお母さんは、詠子よりも少し前の今年の春ごろに、すでにおじいさんから、病状について聞かされていたらしい。しかし、この小屋を出なければならなくなるような確信的な診断がくだるまでは詠子には言わないでほしいと、おじいさんから口止めされていたそう。



私立中学入試15校で  
出題されました



どうりで、イタリア旅行に出版する前、おばあちゃんも元気がなかった。おばあちゃんも、ずっと知っていたのだ。でも、詠子はイタリア旅行から帰ってきたあとに聞かされた。「詠子ちゃんには自分から伝えたいから」「イタリア旅行は、楽しい気持ちで行ってほしいから」「だからまだ詠子ちゃんには言わないでほしい」と、出発前におばあちゃんにそう伝えていたらしいおじいさんのやさしさが、詠子には今、ただくやしくて、腹立たしかった。そうして詠子は、夜がふけるギリギリまで頭をぼうっとさせると、なんとか自分の部屋にもどって、無理やり眠った。

そして、次の朝、起きると。詠子は、声を失っていた。

その日の朝、詠子は、げっそりとした顔で制服を着て自室を出て、ダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいたお母さんに、あいさつをしようとした。しかし、いつもどおり、あたりまえに声を出そうとしたにもかかわらず、詠子の口からは、なんの音も出なかった。あれ、と、不思議に思ったその気持ちも、声にはならなかった。

そのうちに、のどと胸をおさえながら、口をばくばくとさせている詠子にお母さんが気がつき、あわてて駆けよってきた。しかし、そのお母さんに声が出ないことを伝えようと、した時もやはり、詠子から声はみじも出なかった。

始業式は、休んだ。

はじめは、真夏にクーラーのないおじいさんの小屋にこもっていたから体が混乱しただけだと思った。しかし、いくらく休んでも眠っても、詠子の声はまったくもどらず、詠子の失声、物理的な原因からくるものではないことに、すぐに誰もが気がついた。

【続きは単行本で！】

著者 久米 絵美里  
1987年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。『言葉屋』で第5回朝日学生新聞社児童文学賞、『嘘吹きネットワーク』（CD研究所）で第38回うつつのみやこども賞を受賞。著書に『言葉屋』シリーズ、『君型迷宮図』（以上、朝日学生新聞社）、『忘れもの遊園地』（アリス館）、『嘘吹き』シリーズ（PHP研究所）などがある。

表紙・さし絵 もとやまさこ  
1982年、神奈川県生まれ。武蔵野女子大学文学部日本文学科卒。イラスト・書籍の挿絵などで活動。詩集『夏の日』『ゴムの木とクジラ』『ぜいたくななさ』『まどろむ、わたしたち』（銀の鈴社）などで絵を担当している。

## 言葉屋⑩ さようであるならば ついに完結！

朝日学生新聞社は、『言葉屋⑩ さようであるならば』（久米絵美里 作、もとやまさこ 絵、税込1540円）  
『写真』を4月30日に発売します。  
『言葉屋』シリーズは、朝日小学生新聞で連載後、本になった『言葉屋 言箱と言珠のひみつ』から続く人気作。「言葉を口にしない勇氣」と「言葉を口にしない勇氣」を提供するお店、「言葉屋」を舞台に、主人公・詠子の言葉屋修行の様子が見えがれます。記念すべき10巻目となる本作で、物語は完結を迎えます。  
イタリアから帰国後、おじいさんがわずらう未知の病状について聞かされた詠子。つらい現実を受け止めることができず、新学期の朝、目覚めると声を失っていました。恐怖と不安に押しつぶされそうになった詠子に手を差し伸べたの

## 詠子を選んだ進路、恋の行方は？



ISBN978-4-909876-22-5  
定価 1,540 円 (税込み) ※電子書籍もまもなく発売